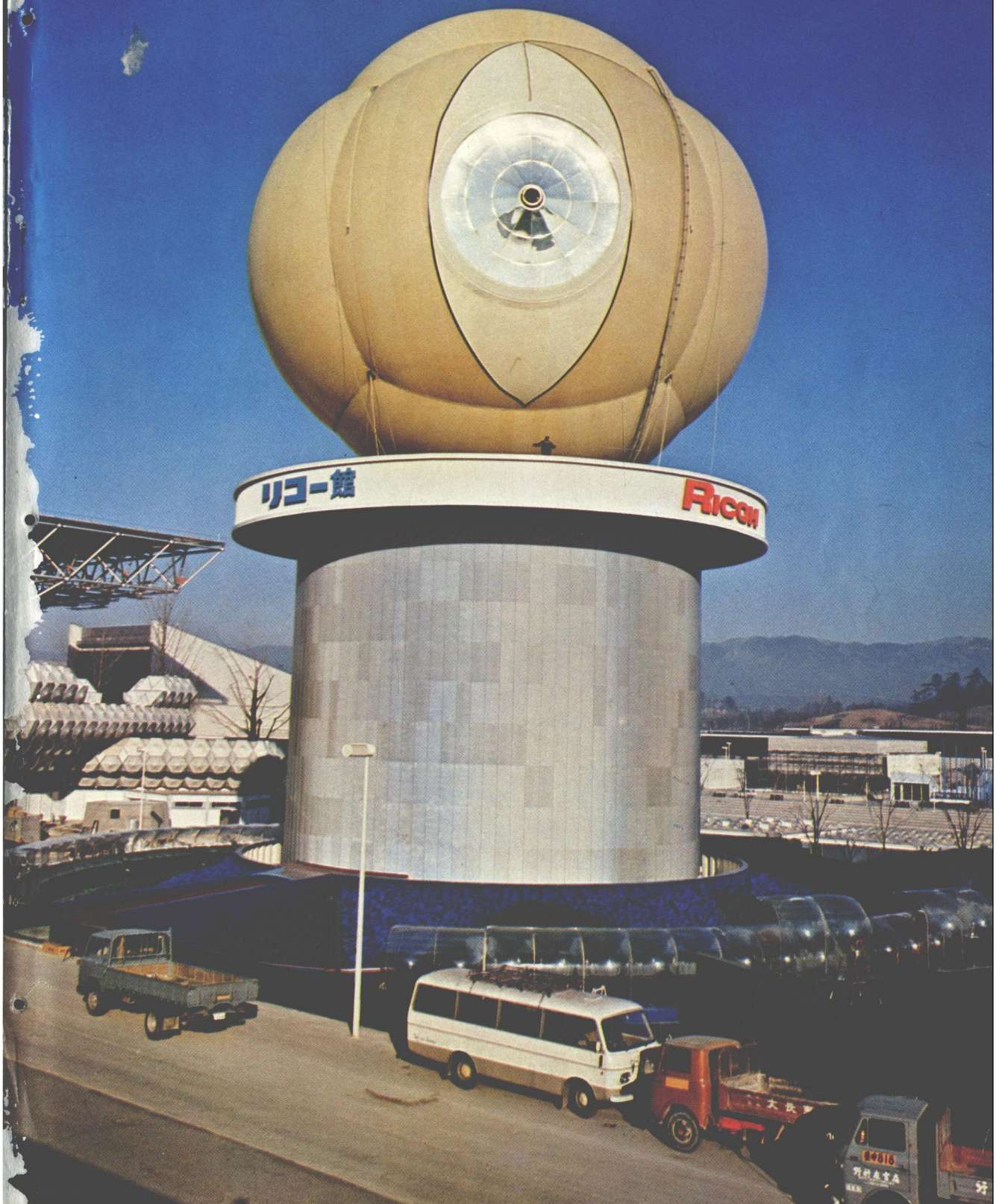


San-ai

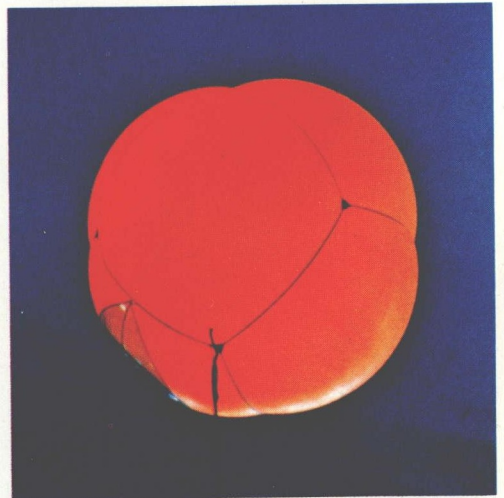
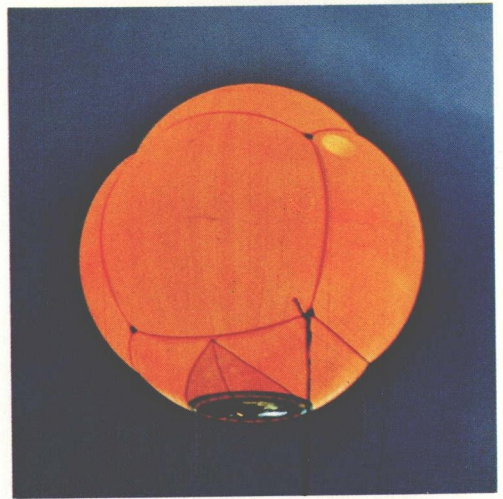
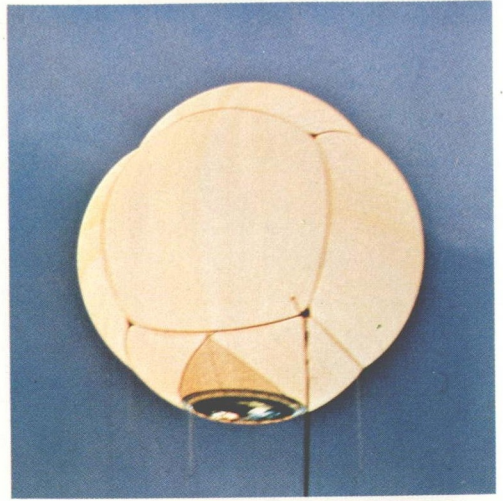
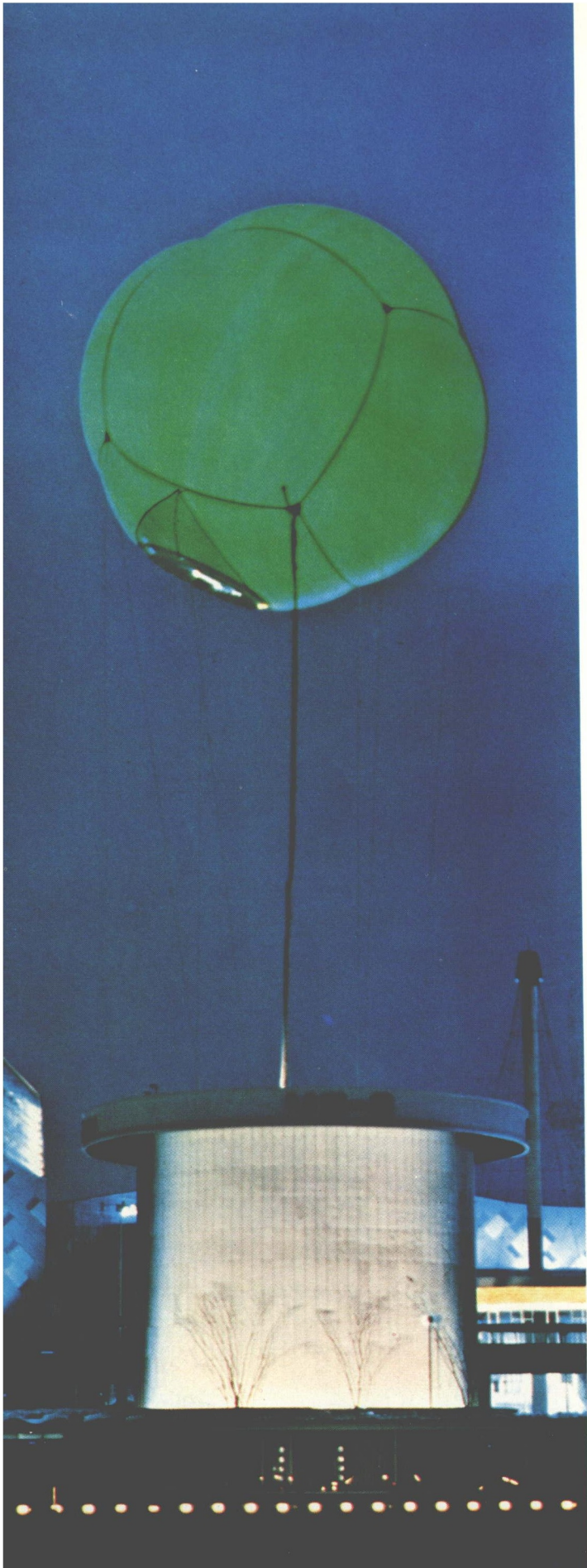
三愛会会誌 No. 63 '70-3
特集：万博リコー館

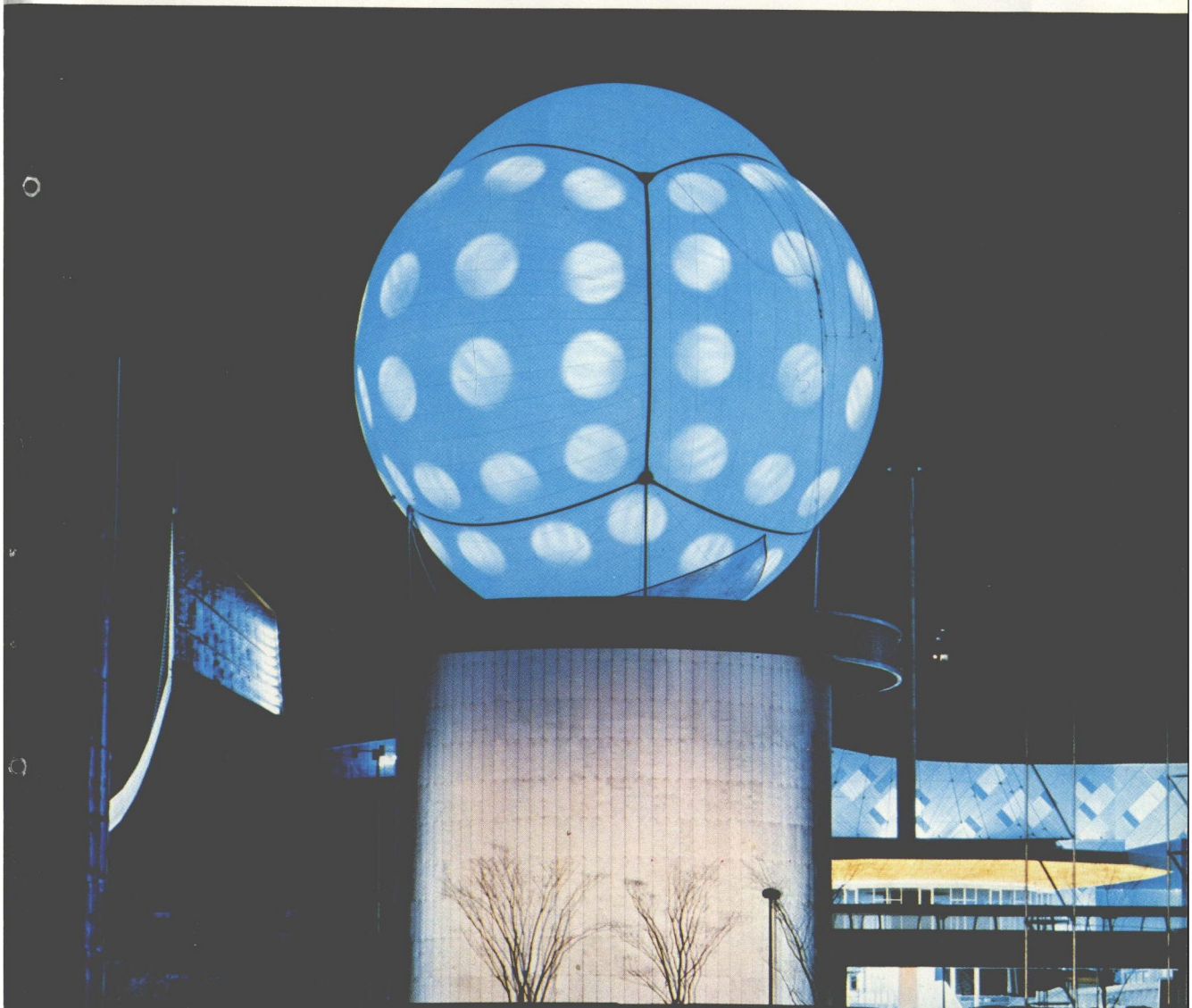
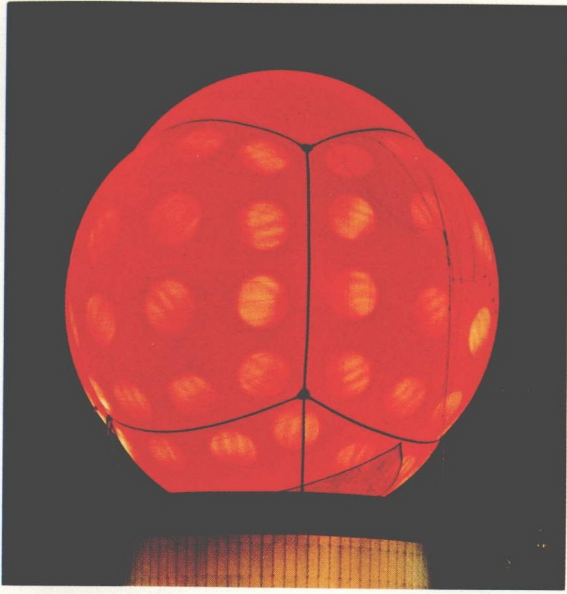


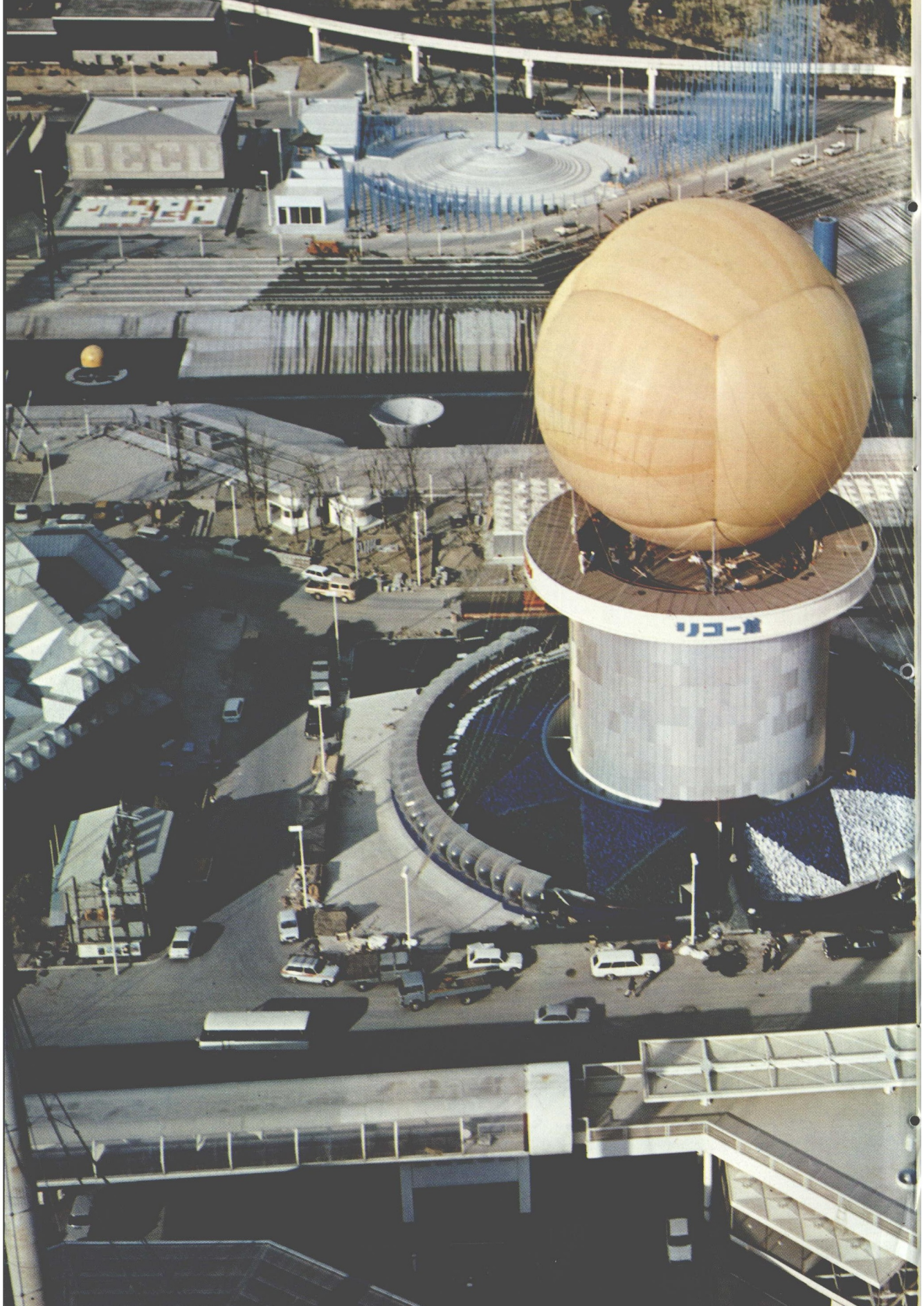
光の芸術リコー館



夜空に奏でる光の幻想曲







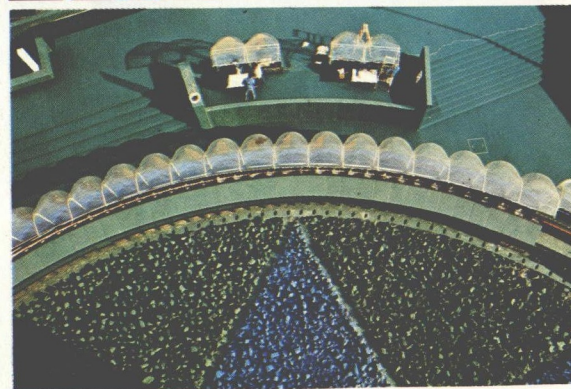




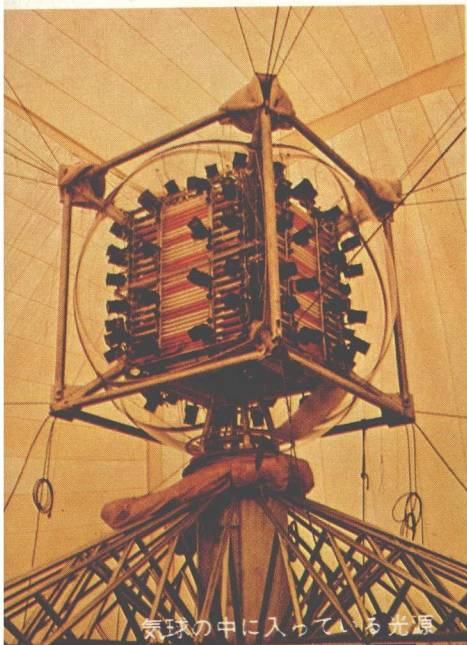
上空から万博会場を写す〈天の眼〉



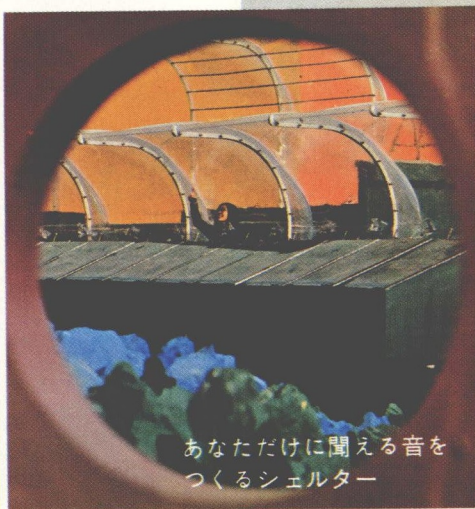
〈地の眼〉の光像をつくるプロジェクター



〈地の眼〉を見る動く観覧席



気球の中に入っている光源



あなただけに聞える音をつくるシェルター



リコー館を
ご案内する
リコー館
ホステス嬢

会場をすみずみまで見渡す「天の眼」をつくる彫刻家多田美波さん

リコー館の構想
企画及び技術開
発を担当する
㈱リコー
常務取締役
山本 巖氏

リコー館の企画
設計を担当する
日建設計工務㈱
計画部長
林 昌二氏

あなた自身を
見つめる
「心の眼」
をつくる
空間造形家
伊藤隆道氏

あなたにしか見えない
「地の眼」をつくる
アニメーション作家
久里洋二氏と写真家 並河萬里氏





私達がリコー館をご案内いたします

万国博開幕を迎えて

日本万国博覧会
協会 会長

石坂 泰三

三愛会 会長

館林三喜男

市村社長の最後の傑作

館林 今年はいよいよ万博の年になりましたが、世界最大の万博といわれ、また東洋最初の万博として、世界から注目を集めている万博の会長としての石坂先生には、いろいろのお話がありとします。今日はそのお話のいくつかをお聞かせいただきたいと思ひまして……。

石坂 会長を仰せつかってから何年たちますか……。よく覚えていないんですが、3年ぐらいですかね。一番初め心配したのは、まず第1に、期日に間に合うかどうかということでした。外国に比べれば、問題にならないほど、ずいぶん遅れていたんです。外国人はああいうものに対しては、とても早くから準備しますから、それに比べるととても間に合わないのが普通と思われるぐらいの期間でした。それからもう1つは、ああいう大きい仕事ですから、何かスキャンダルが起こっては困ると思ひ、これだけは嚴重に注意しておきま

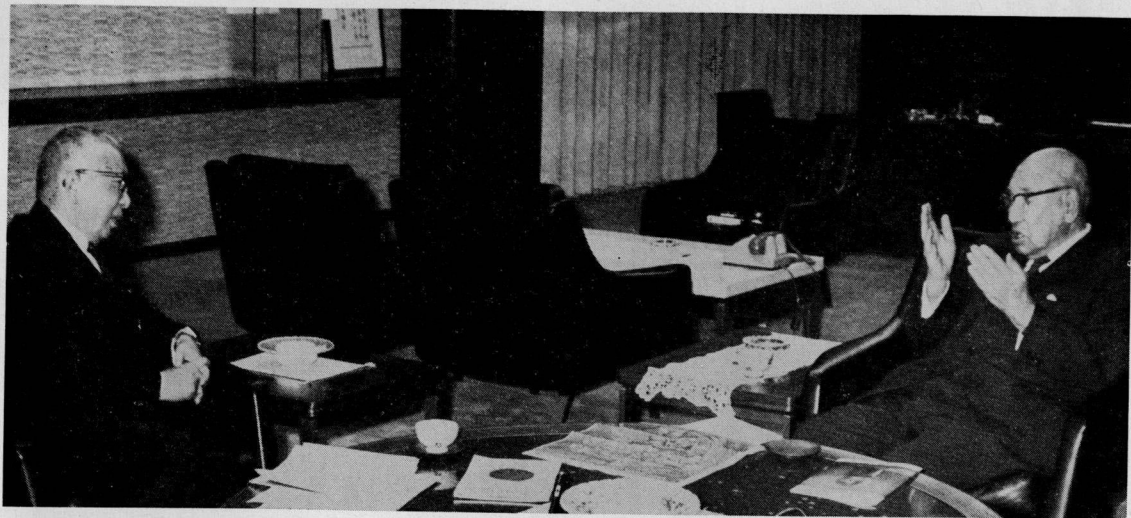
した。まあ心配したといへば、ほとんどその2つで、あと実際のこまかいことは皆さんがよくやってくれたので、私はほんとに、のほほんと過ごしてきました。

昨今の情勢では、大体外まわりの荒仕事は終わり、いま内部を一生懸命やっていますのと、いろいろの設備などを実際に動かしてみるといふ時期になっています。明日もちょっと参りますが、おかげさまで非常によくできて喜んでいて、いままでの規模、計画からいへば、従来の万国博覧会にひけをとらないものができると思ひ、喜んでる次第です。

館林 万博にリコー館を出展しようとしたのは、ちょうど40年にリコーが無配になりました最悪の時代から立ち上がろうとしたそのときですが、そんなときに市村社長がこれに出展しよう、10億の金を出そうと……。

石坂 しかも、あれを申し込んだのはナンバーワンだった。私もよく覚えていてます。

館林 もちろん社内ではみんな反対だったよう



対談中の石坂会長と館林会長

です。まだそれだけの財政的余裕もないというときに決定したわけですから、君たちは将来が見えないとって、社員も役員も叱られたらしいんですけども、いま考えると、ほんとうによく思い切ってやっていただいたと感謝しています。やはり、この出展でリコー三愛グループの名声は非常に高くなりましたね。それともう1つは、石坂先生と市村社長との関係で、石坂先生が万博会長を引き受けられたから、自分でも何か協力したいという気持ちで……。

石坂 その点は多分に、そういう気持ちでやっていただいたと思いますね。なにしろ、私が会長に就任したときは、会場の敷地は一面の竹ヤブだったのですから。

館林 リコーの構想、アイデアは実にすばらしいもので、去年の地鎮祭のとき、私は参列の皆さん方に、市村社長の残された最後の傑作だと話しましたが……。

光の殿堂リコー館

館林 各国や国内各企業の出展館がたくさんございますが、大別すると、建物そのもので競うのと内部のいろいろな展示物で得意なものを競うのとがあります。リコー館は円筒形の建物とその上

の巨大なバルーンが特徴ですが、万博が始まって、この施設が動き始めると実にすばらしいものになるんです。バルーンを「天の眼」、円筒形の建物の壁面を「地の眼」、建物の内部を「心の眼」というんですが、いずれも近代科学の粋を集めたものです。そんな意味で、規模そのものは大きくありませんが、あたりに精彩をはなつものになり一般観客の興味を引きつけることになるだろうと思っています。

高さもソ連館に近い高さで、地上75メートルになっています。バルーンの直径は25メートルで、そこにユニークな眼がつき、夜になると球全体がいろいろな色を発するので、文字通り、万博の一つのシンボルになるんじゃないかと思っています。これらすべては市村社長のアイデアなんです。私たちリコー三愛グループは大いに自慢していいと思っています。

石坂 建物の中は何階かになっているんですか。

館林 建物の高さが20メートルもあるので、皆さんそう思われるようですが、中には階がなくて、全体が大きなドームになっております。館内は真暗で特別の意匠をこらしてあるため、非常に幻想的な雰囲気にしてあります。私どもは「心の眼」と呼んでいますが、東洋的な瞑想をするところだとも言われています。

石坂 地下にも何かあるんですか。

舘林 15メートルの地下があって、上の気球の上げ下げのためにヘリウムを詰めた気球が入っているんです。そのほか機械室や事務室、コンピュータ室もあります。気球は瞬間瞬間に色を変えますが、その光の操作はすべてコンピュータでやるんです。ですから、地下の施設はすべて一般の人の目にはふれないことになっているんです。

上の気球は残念ながら、国産では間に合わず、世界の気球のトップメーカー、唯一のメーカーであるグッド・イヤー社に注文しまして、いまアメリカから3人の技術者がやってきて、組立操作しているところです。グッド・イヤー社としても初めてのことで、非常に力を入れてくれています。やはり一番人気を集めるのは、胴体の「地の眼」でしょう。いままで映画やスライドは暗いところでしか写らなかったのですが、こんどリコーで開発したこの装置は、夏の直射日光のもとでもはっきり見えるんです。しかもある距離でないと見えないので、皆さん不思議に思うでしょう。また同じスクリーンの上に同時に2つのものを写しても、それぞれの場所からちゃんと見えるんです。幸運にも場所の選定抽選で1番に当選させていただいたそうですが、その関係で非常にいい場所を選ぶことができたと感謝しています。前のほうが月曜広場、右がお祭り広場、左が日本政府館、うしろが人工池となっているんです。

石坂 池のうしろの日本庭園はなかなかきれいになりましたよ。

効果のある新聞広告

舘林 エクスポが日本の文化とか経済に与える影響というのは、どう見るべきでしょうか。

石坂 直接にはコマーシャルに考えちゃいけないと言っているわけですが、長い月日のうちには商売につながることは間違いないと思いますね。非常に効果のある新聞広告みたいなものですよ。この間もカナダの人がきて、モントリオールで万博をやったために、あとの効果は驚くべきものだ

と言っていました。カナダですらそうであれば、東洋における日本というもの、初めて世界の舞台にデビューしたというような感じですから、これは効果的にはたいしたもんだろうと思います。

舘林 一般の科学技術の振興という意味からも、波及効果が大きいという気がするんですが。

石坂 日本の生産も上がって、GNPは世界で2、3番目とか騒いでいますが、そんなことを言っているのは日本人だけで、向うの大衆は何も知っちゃあいませんよ。だから、初めて来た人は、おそろくびっくりするだろうと思うんですよ。これは一種の宣伝祭ですが、こういうことは日本人はじょうずですね。

しかし、市村君が亡くなったことは実に残念ですね。伝記や雑誌を読みかえしてみると、あらためて偉い人だったと思いますね。

舘林 私も亡くなってから、ますます偉いなどという感じがすることが多いんです。私とその立場に立ったらどうしたかと考えると、とてもできないようなことをやっておられる。ことに不況のとき、ほんとうに積極的にいろいろやっておられたのは実に偉大だったと思います。

石坂 しかし、市村さんの亡くなったあと、ガタッもしないのは、ほんとうにけっこうですね。そして社業も隆々としていくし、こんなありがたいことはない。それも結局、市村さんが偉かったことと、あなたという後継ぎがいらしたということですよ。

舘林 いや、それは市村社長が最後の最後まで必要なことを決めて下さいましたし、石坂先生をはじめ5人の方々が相談役になって下さったからです。そうでなかったら、ずいぶんゴタゴタしていたと思うんです。

石坂 いや、かえってお世話になるばかりで、ほんとうにどうも相済みぬと思っています。でも、不思議だね。ぼくは市村という人は、彼が亡くなってから見上げましたね。生きていたうちは、そう毎日会っていたわけでもないから、さほどに思っていなかったけれども……。

舘林 4カ月間の病床の姿というのは、一点



日本万国博覧会協会 石坂泰三会長



三愛会 館林三喜男会長

の非のうちどころがないという感じがしましたね。ほんとうに事業以外に何も考えない、事業の鬼だという姿、そして必要なことは、鮮やかにどんどん決めていただきました。

便利なローマ字の字引

石坂 市村さんはあれだけの成功者で、お金に不自由もない人だったが、はたから見てぜいたくだと思うようなことは、何一つしていないですね。

館林 骨董も何もない。あったのはリコー三愛グループの株式だけ。それも全部生前財団に寄付されました。

石坂 何もない。その点はちょっと驚いたよ。

館林 家そのものも質素ですし。

石坂 お幾つでしたかね。

館林 68です。本人も何べんも言っておりましたが、あと3年か5年やって、市村産業団の地固めをしたいということが最後の理想でしたから、その点が一番残念だったろうと思います。

石坂 市村さんは一時、多少政治にも金を使ったと思うけれども、ほかの人と違って何ら求めることはない。ただその人に金を出したということだけらしいね。

館林 ほとんどのたのみにも行かれなかったし。

石坂 これは世間ではちっとも知らないことだ

けれども、ぼくは市村さんにお世話になったことが、たった1ぺんあるんです。おねだりしたんです。それは字引です。外国人がたくさん来ますが、たとえばブリッジならブリッジを、日本語で何というだろうと思うと、それがみんな「橋」と漢字で書いてある。だから西洋人には、わからないんですよ。HASHI とローマ字で書いたものはないかという、これがないんです。

私は標準ローマ字協会の会長もやっているんです。それでぜひそれをやりたいと思ったんですが、標準ローマ字協会はとてもご重態で、氣息えんえん、それだけの力はないんです。それでもいいことだからぜひやろうということで、字引を翻訳する大学生を雇って、始めたところ200万円ぐらいかかるというんです。そのときにぼくは困っちゃって、半分だけ彼にたのんだことがあるんです。半分は私が出しているんですよ。これはほんとに世間に知れない地味な仕事なんです。彼は快く出してくれたんです。彼はそのほかに金が必要があれば、幾らでもやってやるというようなことを言っていたんですが、それ以外にはぼくはお世話になったことはないんです。

こうして作った字引も、売りに出してみるとまるでだめでしたね。それでほとんど寄贈し、大使館などにも少し、くばりました。小さな字引ですが、もらった人はたいへん便利にしているんです

よ。多少は余部が残っていると思いますが、博覧会で大勢人がくると、幾らか役に立つんじゃないかと思います。市村さんの協力がなければ、この字引はできなかつたと思いますね。

求めず正しいことをやる

館林 話は違いますが、石坂先生は第一生命から東芝と一番むずかしい会社の社長になられ日本の最高の会社になされ、また経団連、万博など日本の一番大事な団体の会長をやってこられたのですが、先生の人生哲学というか、信条といったものは何でしょうか。

石坂 何もないですね。私は自分から求めたことは一ぺんもありません。たとえば東大を卒業してすぐ逓信省に入ったときも、友だちが車座になって、どこに行くかくじを引こうじゃないかといったことだったのです。これはほんとの話なんです。それで、逓信省に入ったんですが、丸4年で第一生命に引ばられて、これなんかもほんといやいやだったのですが、当時の法制局長官で東大教授の岡野敬次郎先生や局長の下村海南さんにすすめられ、これは断わってもしようがないと思って、いやいや行つたのです。

館林 それで何年間おられたのですか。

石坂 32年ですか。昭和21年の暮に急にやめてくれと言われた。実をいえば、ぼくはクビになつちつたんです。それで22年、23年の2年間は、私は全く何もしないで、ジャガイモをつくってました。その間収入は一文もないし、税金は財産税がきたし、まる裸になつちつて、碁盤まで売っちゃいましたよ。

そうしたところが、東芝が全部幹部はバージになって、だれもいなくなつちつた。東芝でする仕事はないし、あしたたく石炭もなく、やり手がないんです。そのとき一番多く金を貸していたのが三井銀行だったのでしょ。佐藤喜一郎さんがやってきて、何でもかんでもやってくれと言う。当時の東芝は月給は払えないし、4万人の人間がストライキをやつて騒いでいた、たいへんな時代

だったんです。だから、ぼくもちょっと考えたんですが、助けるとしてやってくれと言われて、いやいや行つたわけです。

あの時はずいぶん荒れてて、組合がまだできたてですから、会社の幹部は組合を恐れて姿をくらし、どこにいるのかわからないようになっていたもんです。組合の人がくると、ご注進ご注進、組合がきたとて、みんな逃げちつたもんですよ。私は盲蛇におじずで、組合の人がきたら会うし、普通にやつたまでです。

館林 経団連も万博も、みんな自分の意思でなく……。

石坂 博覧会もそうですが、経団連のときは、『天平山上白雲泉』という詩を床の間にかけ、新聞記者には、天平山上に水がちょろちょろ出ているときは清冽だが、それが下界に下つて揚子口の口に出れば濁つてしまう。だからおれは絶対に引き受けないよって、さんざん言つたんです。そのうちに引き受けざるを得ないよって、新聞記者に会つたら、『天平山上白雲泉』とか言つても、とうとう引き受けたくないかと言つた。そのときには、こういうのもあるじゃないかと言つて、これは菜根譚にあるんだが、『友と交わるにすべからく三分の狭気なかるべからず』というのを見せて、これだよ、しようがないじゃないかって、いいわけしたこともあるんです。だから私は、こういうものをやろうと思つて、自分から求めたことは、学校を出てから一ぺんもありません。

館林 私たちのところの若い社員に与える経営の信条というのは、どんなことでしょうか。

石坂 ぼくにはそういうタクティックは何もないね。ただ正しいことをやるということだけです。

館林 いつだったか石坂先生のご紹介で、財界の長老の安川第五郎先生に会つて、何十年と事業をやつてこられて一番大事な点は何でしようかとたずねたら、ただ誠意だけだと言つておられました。

石坂 まあそうでしょうね。欲のあまりないということはいいね。

館林 きょうはいいお話を聞かせていただいて、ほんとうにありがとうございました。